

# はじめに

東洋大学 国際哲学センター長  
河本 英夫

今年度は、竹村牧男学長のほぼ最終と思われる草稿と、履歴書、業績表を冒頭に掲載している。長期にわたる大学の運営にたずさわってこられ、大学そのもののブランド価値を恒常的に高めてこられた竹村先生の手腕には、あらためて感謝したいと思う。それと同時に東洋、日本の仏教思想を中心とした広範で深い学識については、記録にとどめ、多くの人の記憶に残るかたちを作っておきたかった。学恩に少しでも報いることができればと願っている。

国際哲学センターは、多くのテーマを扱ってきたが、研究の本性上、息長く持続的に続けることができるテーマでなければならない。それでもそれぞれのテーマで、どこかの段階で区切りを入れていかなければならない。近世哲学研究は、今回区切りを入れて一段落となる。また機会に応じて再度新たな装いのもとに開始することもできる。

できる限り、英文での論文の公開が望ましいが、資金面と時間的な余力の点で、十分に対応できなかったのは、残念であり、心の残りでもある。別枠での企画で補うつもりであったが、そこまでは手が回らなかったというのが実情である。

哲学は、つねにみずからの課題領域を拡張しながら進んでいくという本性的な傾向を備えている。それに応えるように、新たな局面を開き続けなければならない。それは哲学の宿命とも呼ぶべきものでもある。

ミネルヴァのフクロウは夕暮れ時に飛び立つが、野生の鳥の多くは朝日が昇る前にすでに飛び立っている。夜が明けるから飛び立つのではない。飛び立つからやがて夜は明けてくるのである。いくばくかでもそうした局面に直面できるような課題の設定ができたことを願うばかりである。